

大江山

古名

酒吞童子

宮増作

ワキ 源頼光

ワキヅレ 同行山伏六人

狂言 侍女

シテ 酒吞童子

地は 丹波

季は 秋

ワキ、ツレ一声 「秋風の。音にたぐへて西川や。雲も行くなり大江山。

ワキサシ 「抑是は源の頼光とは我事なり。さても此度丹波の国。大江山の鬼神の事。占方の言葉にまかせつゝ。頼光保昌に仰せ付けらる。

ツレ山伏 「頼光保昌申すやう。たとひ大勢有りとて。人倫ならぬ化生の者。いづこを境に攻むべきぞ。

ワキ 「思ふ子細の候ふとて。山伏の姿に出で立ちて。

ツレ 「兜にかはる兜巾を着。

ワキ 「鎧にあらぬ篠懸や。

ツレ 「兵具に対する笈を負ひ。

ワキ 「其ぬしくは頼光保昌。

ツレ 「貞光季武綱公時。

ヒトリ武者 「又名を得たる一人武者。

ツレ 「彼是以上五十余人。

ワキ 「まだ夜の内に有明の。

地 「月の都を立ちいでゝ。く。行末問へば西川や。

波風たてゝ白木綿の。御祓も頼もしや。鬼神なり
と大君の。恵に漏るゝ方あらじ。唯分け行けや足
引の。大江の山に着きにけり。く。

狂言 「如何に童子の御座有るか。

シテ詞 「童子と呼ぶは如何なる者ぞ。

狂言 「山伏達の御入り候ふが。一夜の御宿と仰せられ候。

シテ 「何と山伏達の一夜の御宿と候ふや。恨めしや桓武

天皇に御請申し。我比叡山を出でしより。出家に
は手をさゝじと。かたく誓約申せしなり。中門の
脇の廊に留め申し候へ。

シテ詞 「いかに客僧達。何くよりいつかたへ御通り候へば。

此隠家へは御出でにて候ふぞ。

ワキ詞 「さん候ふ是は筑紫彦山の客僧にて候ふが。麓の山
陰道より道に踏み迷ひ。前後を忘れたゝずみ候ふ
所に。今宵の御宿何より以て祝著申し候。さて御

名を酒吞童子と申し候ふは。何と申したる謂にて候ふぞ。

シテ「我名を酒吞童子と云ふ事は。明暮酒をすきたるに
より。眷属どもに酒吞童子と呼ばれ候。されば此
を見彼を聞くにつけても。酒ほど面白きものはな
く候。客僧達もきこしめされ候へ。

ワキ「仰せにて候ふ程に一つ下され候ふべし。又此山をば
いつの頃よりの御居住にて候ふぞ。

シテ「我比叡の山を重代の住家とし。年月を送りしに。
大師坊と云ふえせ人。嶺には根本中堂を建て。麓
に七社の霊神をいはひし無念さに。一夜に三十余丈
の楠となつて奇瑞を見せし所に。大師坊一首の歌
に。阿耨多羅三藐三菩提の仏たち。我立つ杣に冥
加あらせ給へとありしかば。仏たちも大師坊にか
たらはされ。出でよくと責め給へば。力なくし
て重代の。比叡のお山を出でしなり。

ワキ 「さて比叡山を御出でありて。其まゝこゝに御座ありけるか。

シテ 「いや何くとも定めなき。霞にまぎれ雲に乗り。

ワキ 「身は久方の天ざかる。鄙の長路や遠田舎。

シテ 「御身の故郷と承る。筑紫をも見て候ふなり。

ワキ 「さては残らじ天が下。天ざかる日のたてぬきに。

シテ 「飛行の道に行脚して。

ワキ 「あるひは彦山。

シテ 「伯耆の大山。

ワキ 「白山立山富士の御嶽。

シテ 「上の空なる月に行き。

ワキ 「雲の通路帰り来て。

シテ 「猶も輪廻に心ひく。

ワキ 「都のあたり程近き。

シテ 「此大江の山に籠り居て。

ワキ 「忍びくの御住居。

シテ「隠れすまして有りし処に。今客僧達に見顕はれ申し。通力を失ふばかりなり。

ワキ「御心安く思しめせ。人に顕はす事あるまじ。

シテ「うれしゝく一筋に。頼み申すぞ一樹の陰。

ワキ「一河の流を汲みて知る。心は本より慈悲の行。

シテ「人をたすくる御姿。

ワキ「我はもとより出家のかたち。

シテ「童子もさすが山ぞだち。

ワキ「さも童形の御身なれば。

シテ「あはれみ給へ。

ワキ「神だにも。

地「一児一山王と立て給ふは。神を避くるよしぞかし。

御身は客僧。我は童形の身なれば。などかあはれみ給はざらん。かまへてよそにて。物語りせさせ給ふな。

地「陸奥の。安達が原の塚にこそ。く。鬼こもれり

と聞きし物を。誠なりく。こゝは名を得し大江
山。幾野の道は猶遠し。天の橋立よさの海。大山
の天狗も。我にしたしき。友ぞと知ろしめされよ。
いざく酒を飲まうよ。く。さてお肴は何々ぞ。
頃しも秋の山草。桔梗刈萱我木香。紫苑と云ふは
何やらん。鬼の醜草とは。誰がつけし名なるぞ。

シテ
「げにまこと。」

地
「げにまこと。丹後丹波の境なる。鬼が城も程近し。

頼もしくや。飲む酒は数そひぬ。面も色づくか。
赤きは酒の科ぞ。鬼とな思しそよ。恐れ給はで。
我に馴れく給はる。けうがる友と思しめせ。我
もそなたの御姿。打ち見には。く。恐ろしげな
れど。馴れてつばいは山伏。猶々めぐる盃の。た
び重なれば有明の。天も花に酔へりや。足本はよ
ろくと。たゞよふかいざよふか。雲折り敷きて
其まゝ。目に見えぬ鬼の間に入り。荒海の障子お

し明けて。夜の伏処に入りにつけり。く。(中人)

ワキ「すでに此夜も更方の。空なほ闇き鬼が城。鉄の戸
びらをおし開き。見れば不思議や今までは。人の
形と見えつるが。

地「其丈二丈ばかりなる。く。鬼神の装ひ。眠れる
だにも勢の。あたりをはらふ気色かな。かねて期
したる事なれば。とても命は君のため。又は神国
氏社。南無や八幡山王権現。我等に力をそへ給へ

と。頼光保昌綱公時。貞光季武一人武者。心を一
つにして。まどろみ伏したる鬼の上に。剣を飛ば
する光りのかげ。稲妻震動おびたゝし。

シテ「情なしとよ客僧達。偽あらじと云ひつるに。鬼神
に横道なきものを。

ヒトリ武者詞「何鬼神に横道なしとや。

シテ「中々の事。

ヒトリ武者「あら空言やなどさらば。王地に住んで人を取り。

世の妨げとはなりけるぞ。我をば音にも聞きつらん。保昌が館に一人武者。鬼神なりとも遁すまじ。ましてや是は勅なれば。土も木も我大君の国なれば。いづくか鬼の宿りなるらん。

地「余すな洩らすな。攻めよや攻めよ人々とて。切先を揃へて切つてかゝる。

地「山河草木震動して。く。光り満ちくる鬼の眼。たゞ日月の天つ星。照りかゝやきてさながらに。

おもてを向くべき様ぞなき。

ワキ「頼光保昌もとよりも。

地「頼光保昌もとよりも。鬼神なりともさすが頼光が。手なみにいかで洩らすべきと。走りかゝつてはつたと打つ手に。むずと組んで。えいやくゝと組むとぞ見えしが。頼光下に組み伏せられて。鬼一口に食はんとするを。頼光下より刀を抜いて。二刀三刀さしとほしさしとほし。刀を力にえいや

とかへし。さもいきほへる鬼神を押しつけ。いか
れる首を打ち落とし。大江の山をまた踏みわけて。
都へとてこそ帰りけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著